沖縄県立博物館草創期における文化財収集とその背景

The Collection of Cultural Assets and its

Background on the Beginning of Okinawa Prefectural Museum

外間正幸(*) 萩尾 俊章(*) Seikou HOKAMA and Toshiaki HAGIO

はじめに

萩尾俊章と多良間利絵子は、『沖縄県立博物館紀要』第23号において、「沖縄県立博物館草創期に関するノート」と題した、戦後の博物館草創期の諸活動記録を報告した。沖縄県立博物館50周年事業の一環として『沖縄県立博物館50年史』が刊行されたが、内容を補う意味で紀要の中において、記録をおこなうのが趣旨であった。

資料の調査期間が比較的短かく、草創期の活動に関する補足調査が不十分だったこと、 また文責者の萩尾が説明が舌足らずであったために、外間正幸元館長から不明な点や問題となる箇所についてご指摘を頂いた。

ここでは、前回報告した内容で不明な点や問題となる箇所を中心としながら、再度、外間元館長に補訂をおこなって頂きながら、草創期の博物館活動について記録しておくことが目的である。本文は、外間元館長が文章を記すか、あるいは資料等を提示していただき、萩尾が文責を担当し、両者で校正をおこなった。脚注は前回の紀要やその後の研究動向との関連で、萩尾が記したものである。

1 首里博物館の時代

設立草創期の記録に関して、首里市立郷土博物館の時代の記録で、琉球政府編の『琉球史料 第10集』には首里博物館の行事日記が掲載されている。これは「当時職員だった仲本正真氏が書き残した貴重な日誌である」と萩尾は報告したが、後半部分はその後職務を引き継いだ外間正幸が記したものである。したがって、首里博物館の1949年1月22日から24日までの「名護ハイスクールに於いて当館移動博物館開催」からはじまり、1950年4月18日までの「原田館長は伊江氏の通報により首里城趾より発掘された古石碑を見分したが、それは112年前に来島した支那冊封副使高人鑑の筆(「玉漱」)であることがわかった。博物館に収蔵の必要があると思料する。」までが仲本正真氏の手による日誌ということになる。そして、1950年5月16日の「仲里成人教育課長経由佐々木辰雄氏より百

^{〈1〉}元沖縄県立博物館長. 〈2〉沖縄県立博物館学芸員

年前の首里、那覇鳥瞰図1、那覇福州間航海5体図1、寄贈」から、1951年12月25日の「本日最終日はクリスマスに当り、内外の観覧者最も多く約7千に達す。午後5時盛況裡に終了す」までの首里博物館の日誌が外間正幸による日誌である。その間の内容は、前号に掲載されており、重複するのでここでは割愛する。

なお、同日誌において、1950年10月1日「本日より4日間首里文化財保存会主催の芸術祭に出品、移動展覧会開催。4日芸術祭終了、観覧人4千人」とあるのは、会場が首里美術村であった。また、同じ10月14日の「午前中館長は職員2名と共に那覇高校社会科展に出品並に協力のため出張。本日より3日間。16日那覇高校社会科展終了、3日間の観覧人6千人」とあるのは、会場は那覇高校である。また、1957年11月1日、13日には金城増太郎館長と外間主事は琉球政府に行って文化財購入の件について交渉した。これは、金城館長が就任して間もないため、各県を廻って文化財を収集するというのは難しいので、外間を派遣するということで、文化財収集の予算を増やすお願いをするためであった。

2 日本本土における文化財収集活動

(1) 1958年の文化財収集一仲原善忠先生と我部政達氏

1958年

2月15日:旅行計画書提出

3月5日: 仲原善忠氏「おもろさうし」研究に博物館に来館。3月初め日本に手紙

(仲原善忠・森政三・比嘉春潮・東恩納實惇・島袋全章) を送る

3月12日:仲原氏より手紙(返事)が来た

3月17日:森氏より手紙(返事)が来た

3月22日:比嘉春潮氏、島袋氏より手紙(返事)が来た

4月4日:日本の「文化財収集の旅」に向かう

午後6時出帆

4月5日:鹿児島に到着

鹿児島・熊本・福岡・岡山・京都・奈良・名古屋・大阪・川崎・東京博物館を見ながら、文化財を収集する。収集品115点を購入、寄贈してきた。 東京では、沖縄タイムス、琉球新報、沖縄と小笠原が、新聞に記事が掲

載された。

初期の文化財収集の件では、外間の活動は1957年11月の日誌に見られる通りである。 沖縄の貴重な文化財本土各地の収集は、以下のような収集状況であった。『沖縄と小笠 原』では、「沖縄の貴重な文化財で収集のなかでも貴重なのは、狩野探信筆の『琉球人物楽御絵巻』で二百年くらい前のものといわれ、琉球人が薩摩を訪れた時の儀式の模様を描いた記録である。最古の琉球塗も郷土文化財の逸品を収集」とある。1958年5月11日、「琉球人舞楽御巻物」が『琉球新報』に掲載されている。「『琉球人舞楽御巻物』(東京某氏より譲渡)は、江戸上り琉球士族の風俗を描いたもので、その美術的価値だけでなく、同絵巻(20枚)については、1832年刊の甲子夜話(松浦清山著)で描かれた人物の氏名にいたるまで詳細に説明がなされているという代物。記事には「それに似たような絵はいくつかあるが、一見して狩野派に間違いない筆致といい、『甲子夜話』での説明の合致といい狩野探信画に違いないと思う。と仲原善忠氏は言っており、琉球風俗史上貴重な資料として注目されている」と掲載されている。

『沖縄タイムス』、『琉球新報』では1958年5月12日の記事が掲載されている。『沖縄タイムス』では、所蔵者は仲原善忠氏、『琉球新報』では東京の某氏からの譲渡となっている。このことに関して、萩尾・多良間は「収蔵品台帳では千葉県在住の人物からの購入であり、諸般の事情があったのか、確認の作業は必要である」とした。"」この確認とは、誰がどのようにして支払ったという意味であろうか。外間は、仲原善忠氏から購入し、費用は小切手で支払って(千葉県の白井米子氏に押印して)購入したのである。文化財収集は寄贈とか購入とかある。購入は領収書〔氏名、住所、押印〕が必要である。千葉県の白井米子氏は仲原氏の娘である。所蔵者が都合が悪ければ、親戚や知人の名前で、住所・印鑑があれば良いのである。このようなことは、これまで度々続けている。

例えば、1958「面取抱びん」は台帳には仲田朝進氏となっているが、実際は山里永吉(文化財保護委員長)の所有物である。仲田氏は沖縄グラフの専務であり、山里氏とは知己の仲であった。1958年の「古琉球屏風」は沖縄財団の理事長である比嘉良篤氏(沖縄財団所長、京都ステーションホテル理事長)が所蔵者であるが、実際には、イギリス人フランク・ホーレー氏の物である。1959年2月4日の『琉球新報』に古琉球屏風の件が掲載されている。ホーレー氏は日本でも古書収集家として有名で、ロンドンタイムス東京特派員であった。琉球関係では1300冊あるが、他人に書庫を開放することはなかった。比嘉良篤氏とは知己であることから、仲原善忠氏、親泊政博氏、それに外間と一緒に、ホーレー家を訪問した。しばらくして、琉球政府が比嘉氏から買い取ったものである。後に、ホーレー氏の古書はハワイ大学の東西文化センターに渡った。

ここで、仲原善忠氏の手紙についてふれておこう。「拝啓 詳しい御手紙いただき有難 うございました。君の御上京が予期以上の成功をおさめられ、私も喜んでいます。沖縄 タイムスの記事、気にする必要はありません。私の所有だったのですが、娘にやってあ ったのでけっこうです。男の子は理科系ばかりですから。フランク・ホーレーの方には、 子供の写真は送りましたから全部の写真もあなたがうつした物もお送り下さいませんか (写真掲載)」となっている。

仲原氏には、「文化財の旅」では親泊政博氏(琉球新報社長)、比嘉良篤氏共に大変お 世話になった。殊にフランク・ホーレーの家や、壇王法林寺で尚寧王の遺品を拝見した 時にいろいろお世話になった。

仲原氏は山里永吉、金城増太郎館長とも知っている。外間にも度々博物館展示物の件で、御教示を受けた。世田谷区祖師谷、仲原家に2回も訪問し、お奥さんにもお世話になった。1958年11月24日、『琉球新報』に「仲原氏と京都にみる沖縄の姿」で、5月25日付『沖縄と小笠原』に「仲原氏が尚寧王の遺品を見るところ」が掲載されており、今回の旅記録である。仲原氏は、1964年10月死去された。76才だった。



右から島袋全章、仲原善忠、比嘉春潮 の各氏。左の二人は比嘉先生の奥さん と親戚(1958年、比嘉先生宅にて)



右から上村六郎、親泊政博、人物不詳、 比嘉良篤、仲原善忠の各氏と外間 (1958年、京都檀王法林寺にて)

我部政達氏の収集品は、はちまき入れ、びん型、芭蕉織物、織物、牛馬の玩具などを購入した。我部氏は日比谷高校美術担当であった。外間は日比谷高校美術教室で会った。美術室の倉があり、そこで多数の琉球玩具に出会った。戦前、同氏は沖縄師範に4カ年間奉職したが、戦前に集めた物が大部分全滅した。これだけ残ったと言う話に、外間は感激した。玩具類を購入し、あとは家内に知らせてあると。そこで奥様にお会いした。神奈川県大磯山王町は閑静にあった。奥様から織物とびん型を購入した。主人が言った言葉を思いおこして、外間は当時博物館に玩具類がないので、民俗資料としても貴重な物であったと思った。また、奥様(稔子)からは、1964年陶器2個を購入して、御絵図帳、製地帳を寄贈された。さらに、1973年12月25日には手紙を下された。文面は下記の通りである。

「前略 お手紙拝見いたしました ご無沙汰申し上げております 博物館ご立派におなりになりました由 おめでとうございます お申越の件 是非出品させていただきたく存じます 実は生前銀座文春の画廊にて個展を開くことに決まりましたのに突然亡くなりました故 まだ何でも残ってをります そちらに出品させていただきます外にご希望の方におゆづり出来ますなら故人もよろこんでくれますことと存じます。大磯でねむってをりますより 戦後一度行きたいと申してをりました 御地へ画だけでも行くことが出来ましたらせめてもとの私共の望みで御座います 何かよいお考へがおありでしたらお願い申し上げたく存じます 孝治夫婦は勤めてをります故 連絡は私の方へお願い致します 私三年前から小田原にをります でも画は大磯に御座いますのであちらにお越し下さいませ 日曜日にお願い申しあげます 何卒よろしくお願い申し上げます 取り急ぎお返事方々 お願い迄」

(2) 1959年における文化財収集活動一森政三氏、神山政良氏、東恩納寛惇先生

1959年

1月27日:駐日代表より「屏風」の件について手紙を受ける

2月7日:「屏風」が博物館到着す

9日:主席室にて比嘉秀平氏より受領す

4月16日:文化財収集の旅費の件折衝

5月4日:外間、日本文化財収集の為東京へ行った

大津久之助氏にお会いした。陶磁器を多数収集しておられた

1955年、原田館長が亡くなったので、山 里永吉氏(文化財委員長)は外間の日本に 於ける文化財収集のことを、森政三氏だけ に依頼した。森政三氏は、織物2点、びん 型1点を寄贈された。後はすべて購入であ った。織物(榊原弘之)、織物(原武)、織 物(高田益子)、織物(武田親明)、織物 (原武)、織物(入松田登)、織物(入松田澄)、 織物(宮川栄子)。以上の方々は森氏に、購



森政三氏(右)と外間(1958年、森氏宅にて)

入費を(小切手で)支払った。崎山喜昌氏(元沖縄グラフの社長)東京都渋谷区渋谷の

家で、外間、山里永吉氏と一緒に同席して、森政三氏に物品に引き替えに支払った。森 政三氏は、1964年にも紅型3点、織物2点を購入した。森政三氏は、山里永吉氏が文化 財保護委員長になってから、園比屋武御嶽石門の修理、守礼門復元の作業工事には、博 物館に事務所を持ち、外間が同事務所におり、時々、工事現場に外間も手伝いに行って いた。

それで、東京に帰ってからも、外間が東京に行くことを大変喜ばれた。今回の文化財 収集の旅では、日光の修理理事長であったので、森氏の案内で、日光まで行った。

また、1959年、サントリー美術館では「沖縄の染織」で外間が講演することでわざわざ鎌倉芳太郎氏と森氏が一緒になられて聞いて下さった。調布市深大寺町の森家には3回も訪問し、奥様にもお会いした。また、1980年9月30日、琉球新報社賞授賞式には、沖縄ホテルに宿泊され、遅くまで話して下さった。10月8日、森政三氏が講演、「日本の採色技術は世界最高の技術で残されており、琉球建築の中にもいろいろ採色がある」と語られた。1981年、森政三氏は死去された。

仲吉史子氏〈沖縄わらべ唄研究家在東京〉による「森政三氏の想い出」の記事を抜粋しておきたい。 『昭和11年、私が旧第二高女三年生のころのことである。画家の名渡山愛順先生(故)のご依頼で、私宅では、文部省宗教局保存課の森政三氏の下宿をおひきうけすることになった。(中略)森氏の任務は、守礼門の修復工事であり、『屋根入母屋造りの守礼門は、日本の室町時代の作品だが、中国、南方、日本の手法に沖縄独自の技法も生かされている素晴らしい文化財である』と、崇元寺石門、円覚寺の放生橋、園比屋武御嶽の石門などについて、女学生の私にわかりやすく説明をして下さった。宮大工の知念朝栄氏(故)との出会いを大層喜ばれ、共々に材料さがしに全島を廻られた(中略)。山里永吉氏、中座久雄氏(故)ともご親交があり、壺屋の陶芸家の方々とか、マチグヮのおばさん達との交わりも大事にして、柔和なお顔立ちにふさわしいお人柄で仲々の人気であった。(中略)古い伝統工芸を好まれたが、沖縄ご滞在中はもっぱら玉城盛重翁の舞踊を見に通われていた。〈昭和31年、戦後の再会のとき〉『戦争はむごいねえ、人間の命も、何百年も大切にされた貴重な文化財まで灰にする。これ程の罪悪が許されるのであろうか』と絶句された。それから間もなく外間正幸氏との旧交をあたため、首里博物館に、秘蔵の沖縄の品を数点寄贈されたのであった』とある。

神山政良氏の家に、島袋全章氏と一緒に訪問した。「織物、クィーターは嫁入の道具の一つだった。漆器夫婦枕は、私有するより、博物館に入れば」との言葉に、島袋氏と外間は感激した。神山氏の家は素朴であった。首里汀良町の人で、80余才になるまで東京におられながち、首里の言葉をアクセントに出して語っているのには面白い思いがした。

神山氏は東京沖縄県人会長であり、有名な方なので、ここでは割愛する。

この年の購入資料に「琉球楽童子白馬乗之図」がある。萩尾・多良間は「台帳上は沖縄財団からの購入になっているが、購入の契機になったのは東恩納寛惇氏が東京の古書店で発見したものである。その連絡を受けた博物館で発注して買い受したものである」とした。『琉球新報』には、「首里の博物館にまた珍品一つ。東京の東恩納寛惇氏から天保時代の楽童子を描いた絵巻が送られてきた。同氏が東京の骨董屋でみつけ、それを博物館が発注して買いうけたもの」とある。この掲載からもわかるように、外間が日本から購入したものはない。博物館で予算を取って、東京の沖縄財団が購入したものである。沖縄財団(比嘉良篤所長)には、これまでも文化財収集に、博物館に協力して頂いた経緯がある。「東京の古物屋で東恩納氏が発見し、沖縄に返していた琉球の三味線中の名器<江戸与那>」が、戦後の混乱期にハワイに渡っていて、再び同氏の勧めで沖縄入りした」のもそのような経緯である。⁽³⁾

1954年に、宜志正治氏がハワイから沖縄で「江戸与那」の棹と「与那型」の棹とを博物館に寄贈した。これは戦時中、首里城の郷土博物館に収蔵してあったものである。

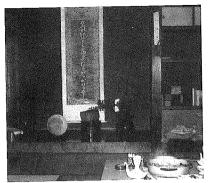
1959年11月11日に、「古文化財を博物館へ 仲村渠致元の魚絵大皿と田名宗経の印鑑、東恩納教授主席に贈呈」が『琉球新報』に掲載されている。それによると、「帰省中の東恩納教授は、きょう午前10時政府を訪れ、主席室で同氏の秘蔵品である琉球古文化財2点を政府立首里博物館へ寄贈した。政府側は當間主席、大田副主席、山里文化財保護委員長、金城首里博物館館長、小波蔵文教局長らが列席、教授は東京からはるばる持参した仲村渠致元作"魚絵大皿"と田名宗経(梅帯すい)作の印篭を惜しみなく贈呈した。魚絵大皿は尚典侯が生前愛用した逸品で、その次男尚旦さんから教授に贈られたもの、印篭は若狭町の旧家安里家から東恩納家に移されたもので両品ともに得がたい貴重品。主席は末長く保存して琉球文化財の保存に努める旨あいさつ、教授も『納まるべき所に納まった』と安心の色を浮かべて退出した」とある。萩尾・多良間は楽童子の絵図も表にはみえないが、東恩納氏のすばやい行動があったればこそ収集できたものであるとした。

外間は1963年2月に「東恩納先生をおもう」を『琉球新報』に掲載した。これは1959年 の文化財収集の旅の記録でもある。⁽⁴⁾ 以下、一部を抜粋しつつ紹介したい。

「私がはじめて先生のお宅にうかがったのは1959年の5月20日であった。(中略) たまたま文化財収集という大きな仕事が私に負わされ、そのためあつかましくも私は先生にご教示を仰ぐべく筆をとった。かねて博物館では日本本土に散在する郷土の文化財が外国に散逸せぬよう、館長が在京の先輩方に依頼し、方々手をうっていた。(中略) 原田館長亡きあとのある日、原田さんが先生にあてた協力依頼の手紙にたいし、先生より送ら



東恩納寛惇先生(右)と源武雄先生 (1959年4月、東恩納先生宅にて)



東恩納寛惇先生宅の床の間。崇元寺 下馬碑拓本ほかの資料がみえる (1959年)

れた返書がふと私の目にとまった。『○○氏所蔵品については肝心の値段の件になると私 にも見当がつかず先方も同様と思いますが、最近鄭嘉訓の書軸を入手された由、その価 値も一つの基準になるかと思います。予算のところも念のためおもらし下さい。安きに こした事はあるまじけれど先方には高きにこした事はあるまじく、打ち合わせた処でき めるほかはありますまい』。原田さんはその実現を見ずして亡くなった。再び先生におす がりしてこの願いをぜひかなえよう、そしてまた出来得れば、今後のこともいろいろと お願いしてみようと、私は無我夢中に手紙を書いて出発前に差し上げた。折り返し、先 生から至極丁重なご返事が届いた。私は実にうれしかった。(中略)この日先生はまこと に愉快そうにお酒をめされ、私たちにもすすめた。豪快に赤ら顔で談ずる先生の風貌は 全く名優の演ずる首里武士を思わせた。床の間にはお座敷にふさわしく祟元寺下馬碑拓 本軸が掛けてある。先生は、書軸はなまぐさくて床に掛けないそうである。側に豪華な 線彫り魚絵の大皿を置き、仲村渠致元の作だと得意になられ、また田名宗経作の印篭を 自慢して見せて下さった。あまりの傑作にみとれた私が、とっさに『この二つを博物館 に譲って頂けませんか』と冗談ともつかずお尋ねしてみた。すると先生は血色のよい顔 をほころばせながら『ウン、いつかはやるよ、やるよ』と笑ってうなづかれた。そのと きの先生の純真な笑顔をみて、私は、きっと実現するだろうとの予感がした。(翌年ご帰 省のとき先生はこの二つを博物館に寄贈のため大事にだいてこられて、主席室で受け渡 された)翌日からしばらく在京中のご協力は勿論、途中、熊本で見つけた木村探元の絵 など、私のメモを御覧になって後も、わざわざ熊本の知人に頼んで写真を写させて取り 寄せるなど、大そう熱心に調査されていた」。その中に記されるごとく、私にとってはた いへん懐かしい旅であった。それから1959年、自著『沖縄今昔』を送られた。1959年10 月3日には「---先日、採拓に関する小抄子を送りました。これで上手になって下さい」 と励まして下さった。しかし、残念なことに、東恩納教授は1963年1月24日に逝去された。 外間は東恩納寛惇氏は博物館の大恩人であったと思う。「楽童子」は東恩納教授のもので あったが、沖縄財団が仲介したのは、何かの都合があってのことであろう。

(3) 1959年~61年の文化財収集-鎌倉芳太郎先生

1959年

6月9日:文化財搬入

7月16日:フランク・ホーレー電報受領

8月19日:米国へ送る文化財の選定

10月18日:台風、全館雨漏り

11月7日:屋根修理工事

12月2日:文化財384点米国へ発送す。屏風の件、沖縄財団へ遅延の文書、発送す

1960年

1月13日:京都、永田万蔵氏来館

1月20日:林子平、屏風の代金を南方援護連合会を経て沖縄財団に送る

4月28日:森政三氏来館

7月13日:「中山王府」の印受領。金城増太郎館長

14日:主席面会、中山王府の印鑑の件、金城館長と外間面接

25日: 博物館雨もり、修理

11月18日:岡部次郎氏に上江洲氏に電報打電

1961年

1月4日:文化財購入計画書提出

1月24日:日本旅行準備するよう政府より電話を受ける

2 月21日:外間、日本へ出発

3月22日:外間、日本より帰る。文化財収集品41点

・陶器14点購入、その中、神山政良氏寄贈2点

・漆器4点購入、その中、島袋盛敏氏寄贈2点

・書跡 5 点購入、その中、神山氏、山崎氏寄贈 1 点

・織物6点購入、その中、鎌倉芳太郎氏、神山氏寄贈1点

・民俗2点購入、その中、神山氏、鎌倉氏寄贈2点

神山政良氏、山崎とね氏、島袋盛敏氏から寄贈3点、3点、2点とあり、また、鎌倉 芳太郎氏から寄贈、譲渡品が11点ある。1961年3月20日の『琉球新報』の記事に「書画軸 物8点、陶器9点、漆器12、紅型その他11点のいずれも"琉球文化の誇り"を示した逸 品が、ちかく博物館で展観されることになっている」とある。

尚旦家では、島袋全章氏とともに行った。尚育王の軸物は台帳に神山政良氏の寄贈とあるように、同氏が仲介したものである。尚旦氏未亡人の美津子さんが『主人が前から沖縄にかえしたいと気にしていたものですから・・・・』、『博物館の展示品の中でも柱にある一つ・・』と外間はいっている」とある。鎌倉家では、トキ双紙は、戦前中に中城村熱田の小橋川善秀さんの家にあったものだと云うのを聞いて、外間は子どもの頃なので驚いた。

鎌倉氏は、1958年4月にお会いしたが、外間は首里の者だと云うと大変喜ばれた。(大中、座間味家に下宿)1959年5月と1961年2月にお会いし、奥様(静江)にもお会いしている。最初は何もほかには無いが、戦災跡から、残った田名宗経の牛かけの下絵を出された。鎌倉家(長男秀雄氏)からは、寄贈・購入が多数あった。

外間が最初におたずねした時は、庭は広く、戦後家は焼けて(蔵書2千冊全焼)、戦後家は質素であった。そして、外間に沖縄人を二人紹介して下さった。長男の秀雄さんは、1958年、冬、来島され、博物館を見られた。日本画家である。1962年に外間が琉球新報に「ようどれ石棺」に掲載された私の論文に対して、鎌倉氏が論説を書いて下さり、外間は感激した。

サントリー美術館と鎌倉氏との関係は、沖縄の染織を通じて、1971年春にはサントリー美術展が沖縄開催(博物館)され、鎌倉氏が戦後初めて来沖され、外間が弁ヶ嶽、首里、那覇、南部を案内した。1972年2月の「50年前の沖縄の写真展」博物館での開催等のお世話になった。そのことに思い出されることは、鎌倉氏は首里言葉を習熟されていた。伊東忠太博士との協同研究、首里城の件、23件の国宝指定、修復、莫大な量のノートの保管、紅型型紙を収集して、600枚を返還された。1980年「不動明王」の軸物を安国寺に寄附などした。そしてまた、『沖縄文化の遺宝』(岩波書店)を出版される際に、外間は真栄平房敬氏(東恩納寛惇賞授賞者)がお手伝いをして下さった時のことなども、目に浮かんでくる。琉球政府主席からの感謝状、「琉球新報社賞」、「伊波普猷賞」(沖縄タイムス)などを授賞され、沖縄の文化高揚に尽くされた功績は多大なるものがある。1983年8月3日に鎌倉芳太郎氏は死去。年84歳であった。1984年3月に、鎌倉氏の資料は沖縄県に譲渡された。

外間は1973年3月28日「鎌倉芳太郎先生と紅型」、1982年10月9日「鎌倉芳太郎先生に受

けた感銘」、1983年8月7日「鎌倉芳太郎先生ご逝去を悼む」、1983年「沖縄文化の遺宝」 が新聞に掲載された。

(4) 博物館所蔵品と文化財収集に関する覚書

天尊殿の鐘は1952年に博物館に入っている。また、1956年5月28日には霊応寺梵鐘が博物館に所蔵されている。この鐘は、終戦直後、与那城村字平安座に有されていた。「終戦直後、与那城村平安座に市政が布かれ、米軍が駐屯した時、どこからか拾って運んだこの鐘を、時の村長新垣金造氏とカンポという司令官が話し合いの上<平和の鐘>として日夜つき鳴らしていたという。その後駐屯軍の引き揚げや市政改革等で鐘の存在も一般から忘れられ、平安座中学校東江正美校長や、松田教諭などによって学校に保管されていたのを、その後川端啓一区長によって保管されているのがわかり、1956年5月28日著者等が行って貰い受け、博物館に陳列した」。1956年5月25日、外間と嵩元政秀(現在、文化財保護委員、沖縄考古学会会長)が平安座に行き、梵鐘を受領した。「前森朝明氏(ハワイ在)から預かっていたもの(前森カマド)。前森朝明さんから博物館に寄付するように」との便りがあった。外間は1956年にお便りを見て知っている。収蔵品台帳には、15の旧天尊殿鐘と43の旧霊応寺の字違いである。立会人の川端正己氏の話では、1962年頃ではなかったかという。収蔵品台帳は1956年2月である。14日州弘氏は外間の友人である。平安座島に行った時は同氏の家に宿泊させてもらった。同氏はその後中学校校長、県文教局指導課長等に就任した。最近、『日本はなぜ祖国なのか』を著した。

『おもろさうし』の紙質については、『沖縄タイムス』に掲載のとおりである。安部栄四郎氏の鑑定でわかる。『おもろさうし』の全22巻と『混効験集』2巻は芭蕉紙である。博物館の大城知善館長は、安部先生によって芭蕉紙であるとわかって大変興味深い。沖縄では紙ははじめ中国から伝来したといわれているが、その歴史からたどる上からも貴重な発見だと思う」と述べている。^の

萩尾・多良間は、博物館所蔵の「中山王府の印」はどこからかの寄贈かが収蔵品台帳にはみえないと記した。しかし、外間が『収蔵品目録』を見てみると、目録には「印鑑<中山王府>、1960寄贈 岡部次郎・上江洲栄信2064」とある。⁽⁶⁾

1960年7月夕刊に、「拝で懐かさや玉の御印判、上江洲栄信翁が発見。"首里城明け渡し"の際紛失?」とある。大阪府牧岡市額田町の岡部次郎氏が所持していたもの。上江洲氏の熱意により、岡部氏から寄贈を受けた。上江洲氏は山里永吉氏の脚本の芝居「首里城明け渡し」を見て、首里城から紛失、といっている。山里氏は首里城から紛失したものかどうかは、「中山王府」印が首里城で使用されたかが判明しないとわからない。東恩納

寛惇氏に聞かなければ、と述べている。金城館長は、岡部次郎、上江洲栄信氏には、沖縄に所蔵の印判を惜しげもなく手渡されたと、話しては感激でいっぱいだ。何とお礼を申し上げてよいか、言葉を知らない。いずれ印判を持参して大田政作主席にも報告し、岡部、上江洲両氏にも琉球政府としての正式の感謝状を贈呈したい。山里氏はおそらく、薩摩藩の文書に使ったものと思われるので、薩摩の文書を調べて、あるいは出てくるかも知れません。いずれにしても、こうした資料が手に入ったことは非常に感謝している。以上、新聞記事をもとに関係者の意見をまとめてみた。新聞には「王府の印判」と親泊、金城、外間と題した写真が掲載された。

また、仲原善忠氏は『琉球新報』に1960年10月「中山王府の印鑑」を掲載した。⁽⁹⁾ それによると、「大坂から伏見までは、関西の大名が、それぞれ川船を提供し、伏見からあとは陸路で、沿道の領主及び幕吏が行列を援助する仕組みであった。このような団体いわば法的性格をもつ団体に、『公印』が必要でなかったとは考えられない。『中山王府』という銅印がこの使節団の『公印だろう』と私は推定する。推定の基礎になる具体的資料は追々述べることとする。(中略)このような事情から『中山王府』という四字を彫った印が、使節団の『公印』として使用されることは、きわめて自然の成り行きであったと思う。ただ、これをおした文書がさいごのキメテになるので、それが発見されるまでは『公印だろう』との推定しか出来ない」と考えた。

以上、外間は、萩尾・多良間が前号の紀要で記した博物館草創期ノートに関して、初期の日本での文化財収集については不備だった点、問題となった点を訂正と補足を行なった。

さて、外間は東京に滞在中は、島袋全章氏にお世話になった。神山政良氏、尚且氏、 その他の方々に。特に、島袋氏の自宅(庭球コートを管理員)は広く、そこに宿泊をし た。新聞報道にも便がよく、所蔵者の家も近くにあり、すべてが好都合であった。当時 は琉球新報が石野朝季記者、沖縄タイムスが由井晶子記者であった。

島袋氏は原田前館長の裁判所時代の職員で同期生であり、三味線の大家でクリスチャンである。島袋氏は戦後沖縄裁判所をやめて東京に永住され、会社勤務であった。1955年5月原田館長が死去した時に「原田館長と私」で琉球新報で掲載されている。この頃は、日本に行くには、船旅で、日本との交流は困難であった。汽車も便が悪く、混雑していた。外間はタクシーに残らず、博物館や所蔵者の家を電車やバスに乗り、足で廻った。

大阪、京都では、いとこの兄の家で宿泊をした。文化財購入資金は所持せず、小切手 に替えて持ち歩いた。東京では、東京地図(23区道路町名番地入)を購入し、使った。

年	金額ドル		
1952	1, 172		
1955	1, 667		
1956	2, 319		
1957	6, 471		
1958	6, 332		
1959	6, 225		
1960	6,000		
1961	3, 220		
1962	1,000		
1963	1, 200		
1964	1, 850		

表-1 文化財購入費の年次 的変遷

	1958年4月	1959年5月	1961年3月	1964年6月
書画・軸物	5点	(神山)10点	15点(神山1)	6点
			(山崎1)	
絵 巻 物	2点			2点
漆器	10点	10点	4点(島袋2)	5点
陶 器	15点	10点	4点(神山2)	
民俗・玩具	20点		2点(神山1)	
			(鎌倉2)	
紅型型紙		20点		
紅型衣装	3 点	13点		1点
紅型風呂敷		11点		
織物	2 点	2点	6点(神山1)	7点
芭 蕉		1点		
かすり		2 点		
手さじ類		10点		
古文書			10点	27点
合 計	57点	89点	41点	48点

表-2 日本本土での文化財収集資料数(『収蔵品目録』 及び新聞資料より外間が作成)。()内は寄贈

購入後の始末について領収書が多くてとても困った。ドルだから、日本円に替えねばな らなかった。税関の検査がこみいっているので、ドルは何ドルが、日本滞在中に何ドル 使ったかを検査をする。文部省の認可を得て、文化財輸出の手続きを取り、船は鹿児島 から出港する。沖縄に帰ってからも、大変である。インボイスの税関の検査をせねばな らぬ。これに1週間程度かかる。これが済んでから博物館に入るのである。博物館に搬 入すると、政府に書類を送付する。検査してこれで終わる。翌年合格検査が行われ、異 状なしとなる。それから、博物館の文化財購入費は、これから見ると、1957年山里氏か ら外間の時代には、購入費は増えているが、その後はずっと減少している。1957~1961年 までは、新聞でも文化財収集を賑わした様に、ほんとに良かったと思っている。今だっ たら、幾ら予算に組んでも、買えるものではない。森政三氏の言っていた事で思い出す。 「外間さんが博物館に居たから、自分は織物、紅型を沖縄博物館に譲渡したのだ。」戦後、 森氏が収集した一級品であった。それから文化財に購入については、所蔵者の云ったと おりに購入が決まるのである。値段を値引きする古美術商とは違う。学者や専門の方々 が、自分の家にあった宝物を、或いは買ったものを、購入する際は、こうした方が、妥 当と思う。また、今までもこうしてきた。1961年、福岡県浮羽郡の首里那覇図を、値段 が決まっていない時に、妥当な値段のクジで決まった。そこのことは、新聞に文化財と 旅で書いた。そして、後で文化財保護委会長(宮里栄輝氏)から、新聞を読んだよ。「よ かったねしと言われた。

外間の手元には当時の関係者からの手紙類が遺されている。森政三氏(外間は手紙11通、ハガキ5枚)に、仲原善忠氏(手紙11通)、我部政達氏、稔子夫人、大部久之助氏、神山政良氏(手紙2通、ハガキ10枚)、東恩納寛惇氏(手紙4通)、鎌倉芳太郎氏(手紙70通、ハガキ5枚)、比嘉良篤氏(手紙1通、ハガキ1枚)、比嘉春潮氏(手紙2通、ハガキ2枚)、島袋盛範氏(手紙2通、ハガキ2枚)、中川伊作氏(手紙3通)、山崎とね氏、島袋全章氏(手紙11通、ハガキ3枚)、その他で



島袋全章氏(右)と外間(1961年、島袋氏 本宅にて)

ある。これらの書簡類は当時の文化財収集の状況を知りえる貴重な資料でもある。

それらの中から、琉球政府博物館落成に関する島袋全章氏の手紙、復帰前の展示会に 関する比嘉春潮氏の手紙を紹介しておきたい。 外間正幸様

謹啓

祝 琉球政府博物館落成

永年に亘り御計画に余る新しい博物館が旧首里、尚家跡に見事落成。龍潭池畔に美観を呈するようになりました事は、誠に慶賀に存じ上げます。然して、その落成式も盛大に挙行せらるまでのご苦労の一方ならざるものがあった事を遥かに御察し申し上げます。

貴殿のこの記念事業は永久に沖縄の教育文化史上に伝えられる事と信じ誠に喜ばしい 事と存じ上げます。

それにまた、先日は御著、「日本の工芸」原色版の琉球が出版され、これが御恵贈に賜りまして、実に思いもかけぬ賜り物に衷心感謝感激いたしました。これも永年に亘り沖縄の祖先方が生み出された琉球芸術作品の収集に島内各地、または日本本土に散在せる諸物の発掘作業に奔走せられた結果そして茲に立派な出版物が出来まして博物館の落成と共に重々の輝かしい記念となりましたことをお喜び申し上げ、御本は家宝として永く保存致します。

私の方はテニスコートを廃し、社員寮と研修所建設のため一時近くの大塚町に移転、引っ越し騒ぎで引っ越し荷物の取り付け追われて早速に御礼も差し上げず失礼の段お許し下さい。

先ずは、両方のお祝い方々御厚礼まで。

奥様のご心労も御察し申し上げます。よろしく。

敬具

1966年10月8日

文京区大塚町

島袋 全章

外間正幸殿

拝啓 三越の「沖縄歴史展」は妻と一緒に観ました。誠に立派なものと敬服いたしま した。改めておめでとうと御礼を申し上げます。

名古屋、小倉、松山での催しも大成功は当然と想像申します。

あらためてお祝い申し上げます。小生、今年で九十の老齢、自動車の氾濫する東京では一歩も一人歩きは出来ません。お笑い下さい。貴方は県立博物館長の重職、大いに自重、ご活躍を心から祈っています。 敬具

1972年4月5日

比嘉 春潮

外間は1967年『今日の琉球』に「新装になった琉球政府立博物館に記す」を書いた。

「当日は東京国立博物館浅野長武館長や日本文化財保護委員会稲田清助委員長をはじめ、在京の郷土の大先輩大浜信泉南援会長や、その他の諸先輩方からも祝電が届いた。特に胸をうったものは、沖縄財団の比嘉良篤理事長からの祝電「今までの、みすぼらしい小屋で、泣いていた香り高い琉球の古文化財資料が今回内容にふさわしい立派な殿堂に陳列されることを聞き喜びに絶えず、これを機会に若い人々が祖先の偉業を認識し、誇りと自信を持つようご指導こう」とあるもので、まことに感激に満ちたものであった。

比嘉良篤氏は、戦後博物館に対しては、物心両面から限りなき援助とご協力を賜って きた。その実情をじゅうぶんに知っている私は、感慨のあまり、式上、電文をすらすら 朗読できなかった。

実際われわれは、この日の来るのをここ数年間一日千秋の思ひで待ち焦がれた。なぜなれば、いままで長い間狭い場所で、保存や陳列の面でいろいろと多くの不便をかこってきたからである。特に他の職場と違って博物館の職員は、貴重な文化財の保管の重責を負わねばならない。それにもかかわらず、これまでの博物館は立地条件や建物の不備のため、漆器の被害はもちろん、年々の台風も全く腫れ物にさわる重いで、十数年間、夏をむかえるたびに戦々恐々と心落ち着かぬ思いで日々を過ごさねばならなかった。全く、比嘉先生の言われるごとく、文化財もさぞ泣いていたことであろう。」

おわりに

外間は、これらの方々は他界されたが、博物館に協力して頂いた事において深く感謝申しあげたい。お手紙に対し、懐かしくて、改めてお礼を申し上げる。これらの博物館における文化財収集で、一番肝要であったのは「人のつながり」であった。このことなくしては、文化財の収集はおこなえなかった。戦後の沖縄を支える、沖縄県出身者、あるいは沖縄に関わりのある方々の公私にわたる全面的な協力で実現できたものであった。(外間、記す。)

外間正幸所有になる新聞切抜帳や関係者からの書簡類は、そのことを雄弁に物語っている。外間正幸元館長の初期における文化財収集の過程を記録する中で、博物館の資料収集、文化財収集は人々の支援の輪の中でおこなわれたことがよく理解できる。(萩尾、記す。)

【脚注】

- (1)前号の紀要で、萩尾と多良間が「確認の作業が必要である」としたのは、旧所蔵者が誰であったのかという点である。博物館の諸記録では不明で、しかも台帳上と新聞記録からは明確な判断ができなかったためである。
- (2)仲吉史子「森政三氏の想い出」『琉球新報』1981年1月11日掲載。
- (3) 『琉球博物館三十年史』P16、1966年
- (4)『東恩納寛惇全集』の付録である"人間的回想"を掲載した。これも外間の文化財収集の旅の記録である。
- (5)外間正幸「琉球の梵鐘について」『沖縄文化財調査報告』p267~268、1978年
- (6)博物館の収蔵品原簿ならびに収蔵品台帳では天尊殿鐘と霊応寺鐘の受け入れ経緯が 混同されている。霊応寺の収集経緯の一部が天尊殿鐘にも付記されていた。台帳転 載上のミスと考えられるが、数多くの資料を博物館が受け入れていること、また収 蔵時から年数を経て関係者が少なくなると、おこりうる事柄と思われる。
- (7)上江洲敏夫「琉球紙の歴史」(安部栄四郎他『沖縄の紙』沖縄タイムス社、1982年)によれば、『おもろさうし』は芭蕉紙ではなく、画仙紙・毛辺紙・唐紙のいずれかとし、しかも全体として一律の料紙が使用されているわけではないとした。同様に『混効験集』は竹主体の料紙であるとしている。このような異説もあり、今後の検討や分析が必要である。紙質については、目視や指先の触覚によるだけでは限界があり、いずれ紙に影響を与えない方法がでてくれば、科学的分析にも委ねられるべきであろう。
- (8)この点は萩尾の十分な確認を怠ったところがある。博物館の収蔵品台帳上には寄贈者の件は何も転記されていないが、収蔵品原簿とそれを印刷物にした『収蔵品目録』には寄贈者の名前等は明記されている。収蔵品原簿から台帳へ書き写す際の記載もれと思われる。ただ、いずれにも収集の経緯は博物館の記録の中には残されておらず、また、仲原善忠「中山王府の印鑑一遊印ではなく公印だろうー」にも伝来や収集の経緯について記載はない。したがって、現段階では外間元館長をはじめ当時の関係者と、新聞資料のみが唯一の情報源となっている。
- (9)仲原善忠「中山王府の印鑑 遊印ではなく公印だろう 」 『琉球新報』 1960年10月3 ~5日掲載。